
ネギまに生まれた始祖精霊

蒼騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまに生まれた始祖精霊

【Zコード】

Z0023Z

【作者名】

蒼騎

【あらすじ】

ネギまの世界に転生した主人公の話。

この作品は作者の処女作です。温かい目で見てください。
編集の情報は活動報告に書いていきます。

この作品は独自設定、キャラ崩壊、原作崩壊、アンチがあります。
苦手な人は見ないでください。

第一樂章 プロローグ

「知らない空間だ・・・」

なんだこの真っ白な空間は？

はつ！まさかここは一次創作でよくぐる神様のいる空間か！いやいやおかしい・・・俺はまだ死んでないはずだ。これがテンプレ通りなら、俺が何らかの理由で死んだから転生させてあげるって展開のはずなんだがどういうことだ？それともこれはただの夢という落ちか？

「その通りじゃ。」さればお主の夢の中じゃ

神様があらわれた。

俺が振り向いてみると・・・眼に光が入つて眩しい！？

そこには顔が輝いていて良く見えなかつたが、良く見てみるとそこにはかなり伸ばした髭とツルツルで光り輝く頭をもつた神がいた。神様の神々しい光つてツルツル頭の反射の光だつたんだなつとしみじみ思つと・・・

「お主は失礼なやつじゃな」

ん？思考が読まれてる？

まあ神様の良くある能力か・・・人の頭を覗き見る変態め！

「これこれ、神を変態扱いするんじやない。」

「で、その変態神様が一体何の用で？それになんで俺の夢の中に入ってきた？」

「それはお主を転生させようかな～と思つてきたのじや。お主の夢の中には、はつきり言つて偶々じや。基本ランダムで誰の夢の中に入るかは僕も分からんのじや」

へ

転生か・・・面白そうだ。一度やつてみたいと思つてたんだよな。魔法とかあるファンタジーなどいうが良いな。やっぱ男は魔法と言う浪漫がある世界に行くべきだと思うんだよね。

「ふお～そうかそうか。良かつたのじや」

「いつたい何が良かつたとこりゃんだ？」

「僕は暇でな。暇だから誰かで遊ぼうと思つたんじや。ちなみに転生させようとしたのはお主で7人目じや。前の6人は転生したくないと言つて駄目だったんじや」

ふうん。転生とか誰もしたことがないことを断る人が結構いるもんだな
なんだろう？

「前の6人は大切な人を悲しませたくないとか好きな人と離れたくないって言って断ったのじゃ」

え・・・？普通神様の転生つて周りから自分の存在を消して転生させるんじゃないのか？

それなら俺もやめよ・・・・・・

つて俺にはもうそんな人いね～。orz

両親はもう死んでるし、好きな人は告つてもキモイの一言ですべて

振られるし・・・

別にこの世界に未練なんてないかもｗでか前の6人はリア充だったのか。

ん？なんか神様が泣いてるんだけど・・・

「グスッ・・・なんて可哀相な人生なんじゃ。儂からの気持ちとして今転生すると、転生先でなにかを叶えさせてやるつ！」

なんて優しい神様なんだろうか！

なにを叶えさせてもらおうかな～やっぱ転生と言つたら能力だよね。俺最強とかやってみたいしな～・・・つて待てよ。

「この転生つて何の能力なしのただの人として転生させるものだつたのか？」

「その通りじゃ。なんで転生するのに能力なんているんじゃ？まあ

お主は今があまつに可哀相なんで能力を一つや二つないでよ。

ほつ・・・良かつた。

でもこれって喜んだらいいのか、泣いたらいののかわからね……

「笑えばこいと黙つよ」

「笑えねーよーなに真顔で言つてんだよ。めつりや傷つくなー。」

「まあ冗談は置いといて、転生先で願ひことせびりますのじか~」

「まざすせびる転生するのか教えてくないか?」

「希望どいでも良いだ。希望がなければフンダムじや」

「じゃ『魔法先生ネギまー』の世界で」

魔法が使いたいならやつぱね、ギまーの世界だよね。
リリのでも良いけどあやしむ管理局がつづりだしどうなによ
り可愛い子が少ない！
ネギまーは正義の魔法使いがつづりだび、原作のクラスメイト
みんな可愛いらしくからな。

それにエターナルロリータといつ貴重な存在もいるし…
あつ・・・リリなのにもいるか・・・でもあれはなんか違うんだよ
な。

「お圭が口リ『ノンとこ「う」』とがよく分かつたのじや。あと早く決めてほしいんじやが?」

おつと、能力はなんにしようかな~

最強でありたいしそれになるべく長く生きたいから吸血鬼ってもりなんだけど、原作みたいに吸血鬼だからって狙われるのは勘弁したい。

その条件で俺の知識の中にあるのはやっぱあれかな・・・

「俺を始祖精霊として転生させてくれ。それで『神曲奏界ポリフォニカ』の始祖精霊の能力を悪いところだけ取り除いたやつを頂戴。具体的に言つと、神曲は必要なしで絶望しても死なないようにしてくれ。

あと羽根の設定として、羽根は基本的に六枚で本気だせば八枚に変わるようにして『神曲奏界ポリフォニカ』に出てくる八柱の始祖精霊の羽根を自由に切り換えて使えるようにして。」

「分かったのじや。その願いを叶えよう

よしーこれでほぼすべての属性を使える存在になれる!~

「まだ他になにかお願ひできる?..」

「ん~・・・小さい願いなら大丈夫じゃ

「それなら俺の生まれ変わる前の今の記憶を忘れないように保存し

てくれ。あと原作の『魔法先生ネギま!』の知識をすべて覚えてるんじゃなくて断片的に残るようにしてほしいんだけど……」

「そんなことなら余裕じゃ。他に能力が欲しいとか言つと困つたぞ
い」

「いやいや、始祖精霊の能力だけで十分だから」

「ならもう転生させるぞ」

「ちよつと待つて。原作のいつに転生させるのかまだ聞いてないん
だけど……」

「そんなお主の能力が決まった時にどの時代に転生をされるかなん
てものは既に決まったようなものじゃ。」

「え……？」

「まあ楽しみにしているのじゃ。今のような悲しい人生を送るんじ
やないぞ」

神様がそういうと突然上空から裸の小さい天使が降りてきた……
天使が……降りてくる……このシーンは……
なるほど……こういう風に転生するのか。
なら……はお決まりのセリフを言つしかないな。

「パトラッシュ・・・僕はもう疲れたよ」

そして僕はどんどん空に運ばれていった。

その途中で、あの名作のキャラは実は転生したんだなと思っていると意識を失つた・・・

第一樂章 プロローグ（後書き）

始祖精靈が分からなければ「ポリフォニカ」のwikiを見てください

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第一樂章　まさかの時代

ん・・・無事に転生できたのか・・・?
身体を動かそうとするが動かない。

おかしいな。身体が動かない・・・それに周りは真っ暗で何も見え
ないし。

あ～なるほど。始祖精靈として転生したから今は精靈として生まれ
る途中で身体というより存在そのものとしての状態か。この状態な
ら普通意識がないけど俺は転生で生まれるし記憶もあるから身体よ
り先に自我が生まれてるのか・・・。

意識はあるけど身体がないから周りを知覚することが出来ないって
ことか。

ここで精靈について少し教えよう。

ポリフォニカの原作の精靈には2つの特殊な能力がある。

1つ、物質化という能力がある。

これは精靈は精神エネルギーで構成されているため、そのエネルギー
を使って物を作ることができる。精靈の肉体もこの物質化という
能力で作っている仮初の身体である。

2つ、精靈雷を使う

これは自身の精神エネルギーを攻撃に使って相手にぶつけるとき、
そのエネルギーが何故か
雷を纏つて飛ぶので精靈雷と呼ばれている。

精霊についての解説も終わつたし、暇だから寝よつと……

ふあ～良く寝た・・・。そして身体はどうなつたかな～
身体を動かそうとすると・・・動かない。
てかまだ身体が出来てない！

暇だ～・・・。そうだ、自分の名前を考えよう。
そういうば精霊には名前が必要つていつてたよつた氣がする。精霊
の名前はその存在を表すと言つから偽名とか使えないし一生使つ名
前を考えなきや！

名前・・・名前・・・なまえ・・・
精霊の名前つて確か名・柱名・精名の3つで構成されていたはずだ
から名前を考えるだけでめんどうだな・・・
ポク・・・ポク・・・ポク・・・チーン・・・閃いた！

俺の名前はレイチャエル・フォン・オルターダにしよう！

すると突然・・・周りに光を感じた。

「はあ～やつと身体ができたか。さてさてどんな身体になつたかな
～・・・って小さ～！それに裸だ！しかも下が付いていない！？」

「おいおい・・・俺は女というより幼女になっちゃったよ。それにこじまじただ・・・周りを見渡しても何もない・・・まずは状況の確認が必要だな。

「えへと、俺は神様からネギまの世界に始祖精霊として転生させてもらひつて女になり今に至ると・・・」

「そうだ！始祖精霊として生まれたなら羽根が出せるはず。それならさしつそく羽根を展開してみよう。」

「で・・・どうやって羽根を展開できるんだ？」

そんな風に考えていると身体の後ろが光りだし六枚の無色の透明な羽根が生まれ、身体が浮かび上がった。

「羽根を意識すると勝手に出るのか・・・でも羽根に色が付いていない・・・」

羽根を消して今度は紅をイメージしながら羽根を展開すると・・・今度は紅い羽根が展開された。

「なるほどね。イメージによって羽根が変化するのか・・・それにしても綺麗な羽根だ」

その後も紅、翠、青、紫、白、黒、銀、金の八色の羽根を順番に展開した。

ふとその時、イメージで羽根の色が変わるなら虹色のようになるかもと思い試してみると・・・そこには八色の八枚羽根が展開された。

「虹色の羽根は無理だつたか・・・でも一枚一色で八色の羽根が出来たから良しとするか」

あとは自分の力と容姿の確認か・・・

「とりあえず海か湖のあるところに移動するか・・・

八色の羽根を展開したまま空に向かつて飛んだ。
そして上空から海を見つけてそこに向かつた。

水の澄んだ海に着いてすぐに海を覗き込んだ。
するとそこには、紅い髪で紅い眼の可愛い幼女の顔があった・・・

「おーおー、ポリフォニカの原作のコーティを幼くしたような顔じ

やないか！いや、どちらかと言つと幼いフランメルと言つべきか・・・

「

今はまだ5歳のよつな姿だが時間が経てば大人の姿になるだろつ。
精靈は長い年月を生きてゆつくり成長するからどれくらいの時間が
かかるか分からぬけど・・・
まあ可愛いから良いな。満足満足。

さて、次は能力の確認といひつかな。

「ポリフォニカの原作での精靈の力はすべて雷のよつな稻妻に見え
るらしいけど、このネギまの世界ではどんなふうに変更されるか楽
しみだな」

海に掌を向けて・・・力を放つ。

ドオーン！！

海に巨大な水柱が出来て、身体が濡れる。

「は？」

「おいおい、なんて力だよ。」

でも、雷を纏つてなかつたな。無色の何かが飛んでいったような感じだつた。

たぶんあれが魔力なんだろうな・・・

「う～ん、この世界の精靈は精神エネルギーを使わずに魔力を使うから精靈雷は使用できないということか。あくまでネギまにある魔力と魔法を使うことが出来るってことかな」

つてことは俺の身体は魔力で構成されているのか。

力の制御は徐々にやつていくとして、次は非物質化できるかどうか・

・

「お～簡単に俺の身体が消えた・・・」

しかも視界が前だけじゃなく360度すべて見渡せられる。つて、オエツ！

急に全方位見れるようになると気分が悪くなってきた・・・

この非物質化状態も力の制御と同様に徐々に慣れていく。

すぐに物質化して今後について考える。

「そうだ、今がいつの時代かわからないから調べよ！」

人にばれないように慎重に空に上がって周りをよく見渡すと、一方は見渡す限り広がる大地で反対側は同じように広がる海があった。周りの気配を察知しようと感覚を広げてみるけど、何も感じない・

・
「あれ？ 近くに誰もいないのかな？」

ある不安を覚えながらさらに上空にあがり大地を見下ろしてみると、そこには大地と海しか存在していなかつた・・・

「おかしい・・・建物がなにもない。人も動物も植物も見当たらない・・・まさか・・・」

俺はさつきまで、まず上空に上がつて人を見つけたら聞いて確かめれば良いかと・・・安易な考えを持っていたがそれはすぐに砕かれた。

「まさか・・・今は地球の誕生した年なのか・・・」

そんな馬鹿な　!!

俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ　!!

第一樂章　まさかの時代（後書き）

次は一気に時代が飛びます

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第三樂章 飢えた者たちとの出逢い（前書き）

時代が一気に飛びます

第三樂章 飢えた者たちとの出会い

よつ！

私の名前はレイチェル・フォン・オルタードだ。
ん・・・? 私?

そう、私だ。

転生してから数日たつて、ふと思つたんだ。

せっかく女になつたんだから一人称を俺から私に変えようつてな。
なかなか慣れないけど時間ならたつぶりあるからその内慣れるだろ
うと思つている。

そして今は転生してから一週間が経つた。

ちなみに私はあれからずつと非物質化状態で生活している。
一週間も経てば360度の視界なんて慣れたものだ。というかかな
り便利だと思うようになった。

なんで非物質化状態で生活しているかと言つと、物質化して生活し
ているとお腹がすくのだ！

そして今この地球に樹と海と大地など自然だけで生物は存在してい
ない。

精靈は物質化して生活しているとその物質化した生物の体の構造も
真似るらしく、人間に物質化したら腹が減るし、眠たくなるらし
い。

だから食べられる物が生まれるまで私はずっと非物質化して生活す
るしかない。

そしてここからが重要なことなんだが・・・

俺の記憶からネギまの原作知識だけが全部抜け落ちている・・・

前世での自分のことや、読んだ漫画や小説の内容は覚えているんだけどネギまだけがない。神様との白い空間での会話でこの世界には魔法があるということは分かるんだがその程度の知識しかない……神様には断片的に残すように言ったはずなのに……これは神様のミスなのか？

魔法を唱えようとしても、唱えるためには物質化しないといけないから魔法はまだ使うことができない。
そして私は何もすることがなくなつた……
もし私が絶望で死ぬ本来の精霊だつたら私はすでに死んでいるかも
しれない……
何もすることがない……退屈……
それを今から何千年と過ごす……何も変わらない退屈な毎日を……

前世で二ートだった私は無氣力で一日中何もしなかつたり、寝てたり過ごして何もしたくなーなんて思つていたがそんなものとは全然違う。

何もしたくないじゃなくて、何もできない……

この時、私は退屈は人を殺すという言葉を本当の意味で理解できた。

私は食べられる物が生まれるまでこの世界を俯瞰することしか出来ない……
だから……

私はこれからこの世界の行く末を見守つていこうと思つた……

（完）

いやいやーまだ終わんないからー始まつたばかりだからーー。
とりあえず恐竜が生まれて繁栄するまでの世界を俯瞰しながら生きていこうー。

多分40億年ほどかかるんだろうなーと思いつながら意識を薄く広く拡げていった・・・

そして、自分と言ひ概念や時間と言ひ概念を感じず、ただ世界と同化したかのように世界を俯瞰していくた。

はいっ！ただいま恐竜の全盛期でござります。

ふう～長かった。そして辛かつた・・・

なにが辛いというと・・・

昆虫や恐竜の生活を見るのが辛かつた・・・

ちなみになぜ辛かつたかと言ひと、生活と性活の両方を見なければならなかつたことだ！

世界を昼夜問わず俯瞰していると嫌でもそんな生々しい光景が入つてくるんだよ！

この鬱憤は恐竜の虐待で晴らすしかないな・・・

そのためにはまず物質化するか・・・

そして物質化して大地に降り立つ

「おお～久しぶりの大地！って私はまだ幼女なのか・・・」

転生してからずっと非物質化状態だったからな～肉体は成長していないのか・・・
まあ今から恐竜時代は1億年ほどあるからそれだけ時間が経てば立派なボディに成長することだろう。これは気長に待てばいいな・・・

「腹(はら)」しらえの前にまず私の服を作らなくては・・・このまま裸だとさすがに恥ずかしい

そう、私は今裸なのだ。すっぽんぽんなのだ。
物質化の能力で服を作ればいいのだから簡単だろう・・・

「えーと、紅をベースに白の模様がついたワンピースみたいなのでいいか

ポンッ！

紅いワンピースっぽいが出てきた・・・
が、これは着れない・・・

何故かと言つと・・・出てきたのが服の構造をしてないし、ビニールも頭や腕を通す穴がなくて一枚の平らな紅い板が物質化された。

「へっ？何これ？なんで板が・・・」

ポリフォニカの原作での物質化は自分の精神エネルギーを使って物質を作り出すというものだ。確か、ポリフォニカでの物質化は精霊雷の扱いが不器用だと物質化の能力もうまく使えないみたいなことを言っていた気がする・・・

つまり、この世界での物質化は魔力のコントロールが上手くなければ物質化の能力も上手く使えないってことか・・・
ならまずは魔力のコントロールから始めよう・・・あとはイメージ力の問題もあるのかもな。

そんなことを考えていると後ろから樹が倒れるような音が聞こえたので振り返ってみると・・・

「うにゃ　　！大きな怪獣　　！！」

恐竜が涎を垂らしながらもの凄い勢いで突進してきていた。
つて、恐竜か・・・今まで上空から見てたから分からなかつたけど・
・
低い視線から見ると怖すぎる！
それに良く見るとこいつはかの有名なティラノサウルスじゃないか・
・

「よしつ！最初の食料はティラノサウルス、君に決めた！」

私は裸のままティラノサウルスと向き合い、六枚の羽根を展開して

飛んだ。

ティラノサウルスが目前に迫ってきて、ティラノサウルスの飢えた視線と交錯した時、右手に意識を集中しながら振り上げ・・・

「エッチ
…どう見てんのよ…！」

バッヂーン！

思いつきりティラノサウルスに張り手をした。

すると、ティラノサウルスの頬が抉れ、歯が砕け、首が折れ曲がり、絶命した。

「幼女の裸を見た者には死を」

ふ 食料Getだぜ！

数十億年ぶりに飯が食える。しかも肉が食える！――
おつと、涎が・・・

「めつしだ めつしだ につくが食える」

歌いながら死んだティラノサウルスに近づき・・・あることに気が付いた・・・

「どうやって食べよ？・・・調理法なんて知らないし、魔法の知識

もないから火が出せない。」のまま生で食べないといけないの・・・

-

ん~ そうか。

この世界にも精靈がいるから魔法を使わずに火の精靈を呼び出して使役すればいいのか。

「魔法の詠唱じゃないが思い立つたが吉口だ。」

「我レイチエル・フォン・オルタードの名を背に召喚す」

レイチエルは朗々と詠唱をはじめた。
静かに。流れるように。

「名を問わず・柱を問わず・枝を問わず・これ数多なる精靈の女王
が命なり・我が名に仕えし誓れを欲するなれば・速く馳せ参じよ・
・・・・・フォンの柱名、オルタードの精名、レイチエルの名の下に
集い顯れよ」

それは命令の句でありながら・・・何処か子守歌の様に柔らかく優
しい響きを帶びていた。

すると・・・地面や空から精靈がやってきた。

一つ、二つ、三つ・・・数えられたのはそこまでだった。

次の瞬間、爆発的な速度で精靈が表われ周りは光に満ちていた。
おそらく、数千数万の精靈がこの場所に集まっているだろう。

『我らレイチャエル・フォン・オルタードの御名にお仕えいたすを欲するものなり。』

集まつた精靈達が一斉に唱和した。

「ご苦労。この恐竜を料理したい。だから料理に必要な分の火を起こして欲しい」

『御意』

レイチャエルの言葉に無数の精靈達が唱和で応える。
そして精靈の群れは一瞬で音もなく消えた・・・
まるでその出来ごとのすべてが幻影であつたかのように
残つたのは、数柱の火の精靈と燃え盛る火だけだった。

「この世界の精靈も数千数万集めれば喋れる様になるんだな・・・
その前に精靈の召喚も上手くいってよかつた。」

物質化能力で黒く堅い鉄板の様な謎の物質を作り、料理を開始する
レイチャエル。

「じゃじゃーん、ティラノサウルスのステーキ出来上がり～」

ステーキが完成した時レイチェルの口は涎まみれだった。

この時代には箸はなくて素手なので、このままだと熱いと思い右手に魔力を集めステーキを掴み食べる。

「ウマーー！」

こうして、レイチェル・フォン・オルタードの波乱万丈の一日は過ぎていった・・・

第三樂章 飢えた者たちとの出会い（後書き）

ポリフォニカルの詠唱のところは丸パクリしました。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第四樂章 恐竜・・・（前書き）

第一樂章の大自然のところを編集しました。

第四樂章 恐竜・・・

私がこの大地に降りて早くも3日たつた。

一昨日は周りを散策して安全そうな山の頂上付近で木の精靈に頼んで家を立てる日が暮れてたのでその日の行動は終わった。昨日は食べれそうな恐竜を数体狩つて風の精靈に頼んで家まで運んでもらい、氷と土の精靈に頼んで恐竜をそのまま凍らせて土の中に入れて保存した。

そして今日から魔法の修業を始める。

まずは物質化能力をあげるために魔力コントロールを修業をする予定だ。

「どうやって魔力コントロールの訓練をしようかな」

前世で魔力なんて特殊なものを持つてなかつたのでいまいち魔力がどういうものか分からぬ。今まで魔力と思っていたのはもしかして気がもしけないし。

手や脚など身体の一部を意識すればそこに筋肉とは別の何かが集まるような感覚があるけどこれが魔力なのかどうかはつきりしない。

「とりあえず羽根をだして考えよ」

まずは紅い羽根を展開してみた。

「いや～やつぱり綺麗な羽根だ。時代が進んでパソコンが普及した
らCGをして羽根を展開した姿の画像を撮つてみよう」

未来のコスプレ計画を思い付きながら魔力の制御方法を考えた。

「魔力のコントロールをする前に自分の魔力について把握しないといけないかも・・・それなら座禅を組んで精神統一をして自分の内にある魔力を感じるとこから始めよう」

座禅を組み深呼吸をして眼を閉じる・・・

あれから一週間・・・

食べるときと寝るとき以外はすべて座禅を組んだが自分の内に魔力を感じることは出来なかつた・・・
おかしい・・・これはいくらなんでも何かがおかしい・・・

「もしかして私には魔力を感じることができないのだろうか・・・」

魔力とはいわゆる精神エネルギーの別称のよつなもの・・・ん?

「今何か答えに近づいたような・・・」

「ポリフォニカでは精靈とは精神エネルギー体として存在していた・・・

・この世界の精靈は精神エネルギー体ではなくて魔力で存在している・

・物質化能力を使って肉体を作り出しても、作り出した物は魔力で構成されているから自分の身体はすべて魔力で構成されているということになる・・・

身体全体が魔力で構成されてるからその中から同じ魔力を見分けるなんて出来ない・・・

「つまりこの一週間してきたことは無駄ってことか・・・」

「いや、今までの座禅は精神の鍛錬と思えばいい。決して無駄なんかじゃない・・・」

「それなら何故物質化能力は不完全なんだ・・・」

物質化能力は魔力の扱いが下手だと思い通りに物が作れないが、存

在そのものが魔力で構成されている私はおそらく自分の意思で自由に魔力をコントロールできるはずだ・・・

「足りないのはイメージ・・・特に立体的な想像力かもしだれないな・・・」

前に物質化した物は平面的で立体構造ではなかつた。
ぼんやり思い浮かべるだけではきちんと再現されないのかもしだれない。

「今度は立体的に、大きさ、質感、内部構造、ビのよつな物質で出来ていいかすべてをイメージして作つてみよ」

む・むむむ・・・

「・・・出来た。真つ赤な幼女用ワンピース」

このワンピースを作るのに10分以上かかつた。
それに精神力をごつそり持つていかれた・・・

「だが良い出来だ。触り心地も良いし軽い」

物質化能力の検証も終わつたし後は魔法だな。
原作の詠唱は覚えてないからオリジナルでいこう!

オリジナルの魔法を考えるようになつてから300年が経つた。

そして今・・・

「ふうはうはうは、魔力を帯びていようと獸は獸。知性がなければ
ただの雑魚に過ぎない!」

「火の精靈よ 我が名の下に集い 敵を滅する道を成せ」

『炎の道』
フレイムロード

呪文を唱えると火の精靈が炎を纏い敵に向かつて伸びる。
敵はジャンプして避けたが炎は突然曲がり敵を追尾し、そしてぶつかる。

曲がりくねつた道ができ恐竜は炎に包まれ炭化した。

「やはり恐竜のボス級といえどこの程度か」

魔法の実験で恐竜などの大型の生き物を殺し続け100年ほど経つと、生き物たちの中に魔力を帯びて産まれる個体が現れ始めた。魔力を帯びて産まれる個体は同じ生物の中でも特に強くなる。おそらく無意識に魔力で身体の強化をしているのだろう。だが意識しているのと無意識でしているのでは精度が違う。

「下級だと傷つく程度だが中級だと一撃死とはなんて微妙な・・・」

「もう魔法については完璧だな。下級は無詠唱で出来るし中級と上級も作れた。それに切り札となる魔法も先日完成した」

この300年は精霊を効率良く呼ぶための呪文を考えるだけで費やした。

私の使う魔法はすべて精霊を呼び出し精霊にお願いして発動するので精霊術と名付けた。

この精霊術は意外と纖細でイメージもまた重要な要素となっているので扱うのが難しい。

例えば、詠唱。詠唱を少し変えるだけで術の威力や効果が違つてくる。先ほど使った火の精霊術を例にすると、「敵を滅する」を抜かし詠唱を短くするだけで追尾性能がなくなるし威力も落ちる。逆に詠唱に「数多なる」を加えて長くすると複数の敵を狙うことが出来る。

また周囲の環境によつて威力が大幅に変わる。雨だと水の精霊術が

強くなり、火の精靈術が弱くなる。他には森など木が多いところで土や木の精靈術が強くなる。このように自分の近くにいる精靈の数によって威力が変わってくるが、この場合は精靈を呼び出す部分を長くするといつもの様な威力で精靈術が使えるようになる。

最後に最も重要なのがイメージとなつていて、同じ詠唱でもイメージを変えることで術の発動が異なる。先ほどの火の精靈術を例にすると、螺旋をイメージすれば螺旋に炎の道が出来るし、直角に曲がるイメージを持ってば敵を追尾するとき弧を描くのではなく直角に折れ曲がるように追尾する。イメージを強く持つと自分を中心として発動させずに相手の後ろ側から精靈術を発動することが出来るようにもなる。

魔法も完成させて、今生まれている恐竜の中でも最強と言えるやつも先ほど倒した。
すると必然的にやることがなくなる。

「する事がなくなつた・・・」

体術を鍛えようにも鍛え方が分からぬ・
もし私が人間なら筋トレという選択もあるのだが生憎私は精靈だ。
鍛える筋肉がない。

今この世界で敵になる相手は恐竜しかいない。しかも知性がなくただ突進するだけの相手だ。それに相手は人間よりはるかに巨大で人の形をしてないから体術を学ぶのは難しいだろう。その上相手はほとんど避けないから全力で殴る蹴るをするだけで勝てるので技術の

向上は見込めないだろ？・・・

それなら「使う」とは一つしかない。

「武器を使った戦闘をするか・・・」

急遽武器を使った戦闘訓練をすることに。

とりあえず武器を作らないといけないな・・・
相手は大きいから普通の大きさの武器じゃ傷を負わす事は出来ても
殺すのは難しい。

それなら一撃必殺を目指した大きな野太刀を創造しよう。

想像すること5分・・・

「出来た。武器は日用品とは違い物質化するのに時間がかかるな〜」

今の私は服など生活に必要なものはすぐに物質化できるようになつた。

例えば、服、ベッド、椅子、机、鉄板、箸、ナイフ、フォークなどなど。

「ちょうど向こうの方に獲物がいるな

野太刀を掴んで宙に浮き、野太刀を背負うと獲物に向かって飛ぶ。なぜ浮かんだから野太刀を背負うかと言うと300年経つて成長した今でも私の身体はまだ120cmに届かないくらいだからだ。それに比べて野太刀の長さは180cmほどある。

野太刀の背負った今の私はまさにモンスターハンター。

「ふふ・・・恐竜よ、話が太刀の鎧となるがいい」

恐竜にばれないように後ろから近づき、一気に加速して一閃・・・

「鬼人斬り！」

パリイーン・・・

「なっ・・・」

さつき物質化した野太刀を斬りつけると恐竜は傷一つ負わず野太刀が砕け、光の粒子となつて霧散した・・・そして恐竜は私の存在に気が付き咆哮した。

「ちょ・・・待つた。ここは退散」

再び上空に戻り、やあほどの原因を考える。

「やはり想像で武器を作るには限度があるか・・・」から武器を作
るか？いや、それはめんどうだからやめよう。武器や体術の訓練は
人類が生まれ技が発達してからにしよう！」

「IJの時代ともお別れだな・・・」

この恐竜時代ですることがなくなったのでまた非物質化してこの世
界を俯瞰して人類が生まれ文明が発達するのを待とう・・・

最後にこの時代に生きた証として隕石にも負けそうにない頑丈な岩
に言葉を残そう。

奏よ 其は我らが盟約なり

其は盟約

其は威力

其は悦楽

故に奏よ 汝が魂の形を

もちひん日本語で岩に刻み海に沈める。

将来日本語が世界共通語になればいいなーと思いつながら私の体は光
となつて消えた・・・

第四樂章 恐竜・・・（後書き）

精靈術はネギまに出てくる魔法とほとんど一緒です。

ただ精靈の扱い方がが違うと周囲の環境についての話だけ違います。また、上級以上の精靈術は主人公にしか使えません。中級ですでに使役している精靈の数が数千を超えていいるという設定だからです。

『炎の道』と『燃える天空』は同程度の威力です。

詠唱についても効率を良くすると原作に近くなるという解釈でしました。

主人公は原作の魔法を全く覚えていないので精靈術をオリジナルと自負しています。

野太刀が砕けた件は魔力で強化していなかつたこととやはり想像では限度があるからです。（fat e風に言うと主人公は剣の属性を持つていないのでどうしても本物に比べると劣るということです）主人公は魔力を精靈の使役とほぼ無意識に近い身体強化だけにしか使用していません。魔力の属性変換など他の使い方を思いついていないのです。

作者は文才がないので修業風景と時代を一気に飛ばしました。

知性のない恐竜だけの世界を書くのは難しく、恐竜相手だけで修業する描写は思いつきませんでした。
すいません

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

第五樂章 出会い（前書き）

アンケートを取りたいと思います

主人公は吸血鬼エヴァと出合いますがエヴァをどうするかです。

? エヴァは原作通り幼女で（妹キャラのように口調は幼くなるかも）
? エヴァを大戦期までに大人に成長させるか

感想のところに?か?だけの数字を書いていただけるだけで構いません。
よろしくお願いします。

第五樂章 出会い

恐竜の時代から姿を消し幾ばくかの時間が過ぎた・・・

恐竜の時代も大きな隕石が落ちてきただことによって地球の環境が激減したことによって死滅していった。魔力を持つて生き残った恐竜もいたが子供を成しても周囲の環境に子供が適応できず恐竜の繁栄の時代があっけなく終わった。

その後は靈長類が誕生したり、氷河期と温暖期を繰り返したり、長い年月をかけて靈長類がようやくヒトの形に近づき知性と呼べるものを作り出していく。

私はその過程をぼんやりと眺めていた・・・

そして、文明と呼べるものが現れ始めると私はまた姿を物質化した・・・

私は今六枚の羽根を広げて空を飛んでいる。

今まで様々な文明を渡り色々な物を見てきた。

戦争や虐殺、奴隸、徐々に体系化してきた魔法使いたちなど長い間見てきた。

どこかで魔法という神秘を目撃した者たちは自らの持つ魔力というものに気付き、独自の魔法を使う奴が増えていった。今の時代は戦争による被害よりも私利私欲のために魔法を使う魔法使いの方が恐ろしい。戦争は事前に察知して対策をとることもできるが魔法使いたちは違う。魔法使いたちはいきなり集落を襲い好き放題やっているので・・・

そんな時代の中私は精霊としての力を使い、戦争で孤児になつた子供を助けたり、瓦礫の下敷きになつた子供を助けたり、魔法を使い暴力を振るう奴に対しては殺したりした・・・

そんなことを繰り返していると世間からは【六枚羽根の天使】と呼ばれ、魔法使いたちからは【紅の断罪者】とか【八柱の大精霊】と噂されるようになつた。

「【八柱の大精霊】って言われているけど実際は私一人なんだよね

」

毎回羽根の色を変えて現れるようなことをしていたら六枚の羽根をもつやつは8人いるつて勘違いされたんだろう。また魔法使いたちと対峙するときは基本的に紅い羽根を展開してたから紅い髪と眼と合わせてこんな呼び名になつたんだろう・・・

「はあ・・・魔法の悪用をビリビリか減らすこと・・・」

「そのためにあなたの力を貸して欲しい。【八柱の大精靈】の一柱
よ」

後ろから突然声をかけられ振り向くとそこにはフードを深く被った人物がいた。フードを深く被っているため顔は分からぬがこいつを見ていると何故か頭がズキズキと痛む・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどどの言葉・・・どうとかできるかもしれませんよ?」

(二)二つの面についていることは本当なのか?少し確かめてみるか・
・

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力づくでさせてみせよ」

「わかりました」

「そう言つとお互ひは少し離れ……相手が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大
剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死
の塵に」

「光の精靈よ 我が名のもとに集い 一條の光となり 敵を切り裂
く剣となれ」

『燃える天空』『光の剣フォトンセイバー

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。
相手が放つた炎と光がぶつかり……炎を切り裂きフードを掠めた。

「なつ・・・・・!？」

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

「・・・・・・・・・・・・」

「そう落ち込む出ない。話を聞いてやるから……お前の名前は?」

「私の」とは斯オとお呼びください」

フードの奴がそういうとフードを取り顔を見せた。

(女か・・・)

顔を見た瞬間・・・
頭の中に何かが流れ込んできた・・・

【造物主】
ライフ・メーカー

- ・魔法世界を作り、始まりの魔法使いと呼ばれる
- ・造物主の捷という魔法具を持つ
- ・魔法世界の魔力枯渇により消滅するのを察知して『完全なる世界』を組織し、魔法世界の住人を助けようとするが何者かに阻まれる

(これは未来に起ることの映像・・・? そつか、原作での出来ことか! するとこれが神様にお願いした断片的な記憶か。今記憶が戻つたということはおそらく、原作のキャラに出会い名前を知ると記憶が戻つていくということか・・・)

「どうしました?」

「なんてめんどうな・・・」

「はい?」

「なんでもない。話を続けて」

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することができますが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「（なるほど、いつこう理想を基に魔法世界をつくりたのか）それはどうやって作るつもりだ？作るとなると大きすぎるといづれかれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結界というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「（認識疎外ね・・・簡単そうに言つてゐるが近づく人すべてに作用させるとなるとかなり難しいはずだ。よくそんな難しい魔法を作れたな。こいつは魔法の才能があるのかも知れないな）私は何をすればいいのだ？手伝えるようなことはないと思つぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私との契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっています。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はいーお願いします！」

スオは元気よく返事するとスオの足元に魔法陣が浮かんだ。

「あ、あの・・・」の陣の中でき、キキ…キスをすると契約が出来ます！」

「分かつた」

（生涯童貞だつた俺がいきなりキ、キスだと…？餅つけ餅つけ…つて違う！落ちつくんだ俺！スオは眼をつぶつているがこのままだと動搖が悟られてしまつ…良く見るとスオつてかなりの美人だな…）

眼をつぶつているスオを見てさらに動搖する私。

（そんなに氣負うことはない。今の私は女なんだ。これはただのスキンシップと思えばいい。ええ～い！女は度胸！…）

「いくよ…・・・」

「あの、優しく…・・・んつ…・・・」

そう言つて眼をつむり、眼をつぶつているスオに顔を近づけ…・・・唇を重ねた…・・・魔法陣が光り出し、2秒ほどで唇を離すと魔法陣は消えカードだけがその場に残つた…・・・

何も反応を示さず頬を赤らめ眼がとろんとしているスオに声をかけた。

「おい、これで完了か？」

「…………まつー？」あらうわもだしたーありがと「う」やこます！」

勢いよくお辞儀をするスオ。じつやいらっしゃったまく契約が出来たよつだ。

「上手くいってよかつたです。なにせ初めて発動させる魔法でしたから不安があつたんです。アーティファクトカードも出たし、魔力のパスも・・・繋がつてます／＼／＼アーティファクトカードのオリジナルは持つていてください。複製版は私が持ちますので。また今回契約は本契約とさせていただきました」

「そのアーティファクトカードとはどうのようなものが出たのだ？」

「待つてくださいね。えーと、主はレイチャエル・フォン・アルター。レイチャエル様ですね。素敵な名前です。アーティファクトは造物主の掟という名前らしいです」

「（なるほど。この魔法具を使って魔法世界をつくるのか）早速出してみて。もしかしたらこれから計画に役に立つかもしれないか

「ひ

「そうですね。このカードを持ってアーティファクトと言つと魔法具が出てきます。逆に魔法具を消したいときはアベットと言います。行きますよ・・・アーティファクト」

魔法具を出す呪文を唱えると・・・大きな杖といつより大きな鍵が
出てきた。

私が見た原作の形状と同じだったのです」しほつとした。

「これは・・・物凄いアーティファクトかもしません。これが
れば私たちの計画も上手くいくかも・・・」

「それは良かった。困ったことがあつたら何でも言え、協力する。
じゃあね」

さつきキスをしたことが急に恥ずかしくなり、スオの顔がまともに
見れない。

おそらく顔が赤くなっているだろうからスオにばれないよう一時逃
げよう。

翠の羽根を展開して飛び去る・・・

「あ～ん、待ってください～レイチェル様～～

第五樂章 出会い（後書き）

未来の造物主との出会いでした。

スオは主人公を姉様と慕う妹キャラでいきます。

造物主のキャラが全然違いますが気にしないでください！

次回はスオ視点の話です。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

閑話 初めての敗北、そして（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

? 幼女のまま

? 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

1日に2つ目投稿

閑話 初めての敗北、そして

レイチエル様との出会いから時間は少し遡る・・・

私の名前はスオ。

あるところでは魔法の天才などと言われている。

魔法の開発、魔法の威力に詠唱速度、すべてにおいて他の人より優れている。

魔法の才能に恵まれ、その上人一倍努力をしてきたから天才と呼ばれるだけの自負もある。

だが、最近は天才と呼ばれることにうんざりしてきた・・・

それは周りの人私が今までしてきた努力を知らずに、私のことを天才と呼び、私と競い合うことをしないからだ・・・
例えば、

初めは私を目標に頑張るとか言つていたが少し時間が経つと、「スオは天才だから簡単だよね~」とか「俺もスオの様に天才だったらな~」とすぐに諦め努力することをやめるようになった。

そんな中、他の魔法使いたちが話していた噂話を聞いた。それは魔法使いが悪さをすれば、【八柱の大精靈】と呼ばれる中の紅い羽根を持つ一柱【紅の断罪者】に殺されるという話だった。

私はその話を聞き、私以外の魔法使いでそんな簡単に他の魔法使いたちを殺す事が出来るのだろうかと少し興味が湧いた。

【八柱の大精霊】・・・それは魔法使いの間では人の姿をしているが精霊の主で長い時を生きていて六枚の羽根を持ち、羽根の色が違う八柱の精霊が存在していると言われている。他には人の姿をしているのだから、ただの魔法使いで魔力を使って八色の羽根を使い分けてだしていに過ぎないと主張する輩もいる。

このように色々な主張があり謎の多い存在なのである・・・

その噂話を聞いて数日たつたある日・・・

私は魔法の研究に一段落が付いて、ぶらぶら休憩していると、【八柱の大精霊】の目撃情報を聞きチャンスと思い空を飛んで急ぎそこに向かっている。

私のある計画のために・・・

目的の大精霊を探す事30分・・・

ようやく翠の六枚羽根を広げている存在を見つけることが出来た。

・・・が、羽根を広げているのはまだ150cm程の少女だった・・・

・

なんて凛々しい姿・・・

(大精霊と言われる存在がまさかこんな凛々しい方だったなんて・・・それにものすごい魔力を持つてているけど見た目は人間の女性と大差ない。羽根がなければただの人間だと見逃してしまいそうなほど・・・)

初めて噂の存在を見つけた私は羽根を持つ少女の姿に胸が高鳴った。初めは驚いていたがすぐに我に返り【八柱の大精霊】の一柱といわ

れる少女に声をかけようとした時、少女の独り言が聞こえた・・・

「はあ・・・魔法の悪用をどうにか減らさないと・・・」

(喋った!?)しかも独り言?やっぱり人間だったの?・?・?

それに私と同じことを考えている・・・

私も魔法が悪用されるようになつてからはどうやってその悪用を減らそうか考えていた。

そして私の出した答えは、魔法使いたちを一か所にまとめ魔法を自由に使えるがきちんと管理する場所を作るというものだ。

この人だったら私の計画に賛同してくれると思いつき声をかけた。

「そのためあなたの方を貸して欲しい。【八柱の大精靈】の一柱よ」

なるべく高圧的にならないよう気を付けてこうが・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどの言葉・・・どうにかできるかもしれませんよ?」

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力ずくでさせてみせよ」

「わかりました。（あ・・・フード被つたままだつた）」

そう言つとお互ひは少し離れ・・・先手必勝と思い私が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 净化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

「光の精靈よ 我が名のもとに集い 一條の光となり 敵を切り裂く剣となれ」

『燃える天空』 『光の剣』フォトンセイバー

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。

私が放つた炎と光がぶつかり・・・炎が切り裂かれフードを掠めた。

「なつ・・・！？」

私の最大呪文があつさり破られる。

それも私の最大呪文より圧倒的に短い呪文で・・・

(すゞい・・・呪文は短い割りに詠唱速度は遅いが、それは遅いといつより流れるようにゆつたりと誰かに囁きかける様な優しい感じ。・・)

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

(この人着いていけば何か分かるかも・・・それに私以上の魔法を使える人なんて初めて・・・)

「せう落ち込む出ない。話を聞いてやるから・・・お前の名前は?」

「私のことはスオとお呼びください」

私は名前を言い、取り忘れていたフードを外す。すると美しい顔が一瞬、歪んだによつて見えた。

「どうしました? (まさか私の顔がそんなに変!?)」

内心動搖しながら尋ねる。

「なんてめんどうな・・・

「はい?」

「なんでもない。話を続けて」

(気になる・・・そりや眼の前にいる美しい姿に凜々しい顔をもつ

人に比べたら私なんて平凡な部類に入るんだろうけどや・・・でも、まずは私の話をしないと)

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「それははどうやって作るつもりだ？作るとなると大きすぎるとこすればれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結界というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「私は何をすればいいのだ？手伝えるようなことはないと思つぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私との契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっています。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はい！お願いします！」

私はつい嬉しくなり勢いよく返事をして魔法陣を描いた。

「あ、あの・・・」の陣の中でき、きキ…キスをすると契約が出来ます！」

（あ～緊張します・・・初めてのキスがこんな綺麗な人なんて。それに私からキスをせがむなんて、なんてはしたないことを・・・）

「分かった」

（え！？即答？まさかこの人は経験豊富なのかな・・・？そ、それなら眼をつむつて待つていましょう）

「あの、優しく・・・んつ・・・」

（な、なんて柔らかい・・・それにキスってなにか満たされる気がします～）

「おい、これで完了か？」

キスの余韻に浸っていると突然声をかけられた。

「・・・はっー♪ちやつわまでしたーありがと「うー」やっこますー」

その後は契約について話をして、手に入れたアーティファクトを出現させた。

（これが私とレイチャエル様との愛の結晶・・・感じる魔力が凄いで
す）

私がアーティファクトに夢中になつていると突然レイチャエル様がどこかに飛んでいった・・・

「あ～ん、待ってください～レイチャエル様～～」

こうして2人での旅が始まったのであった・・・

（絶対に逃がしません！どこまでも追いかけていきます！～）

閑話 初めての敗北、そして（後書き）

次話から更新が遅くなるかもしません。

週1の更新を目指して頑張ります！

ああネタが欲しい・・・特に魔法世界創造からエヴァに会つまでの・

・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。
できればアンケートに答えて行ってね。

第六樂章 私たちの計画（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中
? 幼女のまま

? 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

? 一票
? 七表

前話からかなり時間が空きました・・・すいません

第六樂章 私たちの計画

（スオ side）

お姉さま（レイチエル）と旅を始めて1年と少し経った頃・・・

お姉さまからの契約で手に入れたアーティファクトのおかげで計画は順調に進んでいる。

つい先ほどこの1年の結晶である転移魔法の開発に成功したところだ。

転移魔法とは壁など障害に関係なく物体を瞬時に移動させる魔法で、今の魔法の知識では実現不可能とされてきたが私のアーティファクト『造物主の掟』の能力のうちの1つであるリロケートという転移能力を解析して作ることが出来た。

この転移魔法を見たお姉さまは今まで考えたこともないようなことを言つてきた・・・

「地球に魔法使いの国を作るをやめて、どこか別の場所・・・例えば火星とかに造るのはどうだらうか？」

私はこの言葉に無理だと思つた・・・

私の開発した転移魔法は複雑に出来ていて分魔力の消費が激しく、

長距離転移することとする難しいのだ。それを地球の外にある火星まで転移するとなると魔力が圧倒的に足りない。

そのことをお姉さまに伝えると・・・

「この地球には靈地と呼ばれる高濃度の魔力が湧き出る場所が無数にある。大気にある魔力とは地球という一つの生命が作り出すエネルギーで靈地はそのエネルギーを放出する場所だ。大きな靈地の魔力を使い火星まで転移するなら魔力など余裕で足りる。だがまあ同じ場所で転移魔法を連續使用して靈地の魔力が枯渇すると魔力を放出する口が閉じて靈地じゃなくなりただの土地になるけどね・・・」

「そんな場所があるんですね・・・でも火星は人が住めるような環境なのですか？」

「火星に人が住むのは難しいだろう。海がなくほとんど水がないし、空気も薄い。なにより魔力が僅かしか存在することが出来ない。火星と言う生命が作る魔力は地球と比べると微々たるもので靈地も小さいから大気に広がる魔力は少なく、広がった魔力もすぐに消滅する」

「お姉さまは火星について詳しいですね。意外です・・・」

「なに、一度火星に行つたことがあるんだよ。私は精靈だから酸素なんて必要ないし暇だったから旅に出たんだよ。まあ一度行つて帰るまでに魔力不足で死にそうになつたが・・・」

「それで人の住めない火星にどうやって魔法使いの国を造るといふんです?」

「それはね・・・火星の少ない魔力を使って、火星の大地を触媒として大地を覆う様に人が住めるような幻想空間を造り、さらにその幻想空間全体に外から位相をずらす魔法ををかけて地球からは元の火星のままに見えるようになることで、魔法使いだけの世界の誕生だ」

「・・・・・ 憂い。それなら上手くいきますよ。早く・・・一刻も早く魔法世界を作るための準備をしましょー。」

さすがお姉さまー！」のよくな」と私だけでは思いつきませんでしたし、思いついたとしても方法が分からず断念していたでしょう。これでようやく私の夢が叶う・・・

「まあ待て」

私が喜んではしゃいでるとお姉さまが私に声をかけてきた。
声が少し暗く聞こえたのでお姉さまの顔を見上げると真剣な表情をしていた。

「火星に魔法世界を造るのには重要な欠点がある。まず1つ目、火星が作り出せる魔力が魔法世界の創造と維持、認識阻害の維持に必要な魔力に届かないかもしないこと。2つ目、もし幻想空間を作り出せてもその中に魔力は一切ないから溜まるまで時間がかかること。3つ目、国とは違う世界を造るのだから造った後がかなり大変になること。4つ目、地球外に魔法世界を造れるのは『造物主の掟』を持つお前だけ。最後に、幻想空間はいつか必ず崩壊すること……」

さつきまでの笑顔が最後の欠点を聞いた瞬間に顔色を変えていった。

「どうして・・・どうしてそんな崩壊するなんてわかるんですか・・・」

「必然だ・・・今の火星は徐々に生命の活動を弱めて行っている。だから魔力の生成する量が減少しつつ幻想空間を維持できなくな。すると幻想空間がなくなり人の住めない火星に人間が放り出されることになる。」

「そんな・・・火星に放り出されたらその人たちが死んじやう・・・そんなことが分かっている世界なんて私には造れない・・・」

お姉さまは私にいつかたくさんの人を殺すだろう世界を作れと言うの・・・
間接的とはいえ私が原因でたくさんの人人が死ぬ・・・考えるだけで身体が冷えてく・・・

「そんなに震えるな・・・崩壊すると言つても一度幻想空間を創造してしまえが数千年は確実に持つ。魔法世界内で何も起こらず平和だつたら数万年、あるいは数十万年は持つだろう。それに時代が進み、技術が進歩すれば火星に人が住めるようになるかも知れない。」

「・・・でも・・・それは可能性の話なのでしょう・・・もし・・・」

火星に人が住めないまま幻想空間が崩壊すると考へると……

怖い……」わいよ……

そんな危険があるなら魔法が人にばれたり、魔法使いが住める場所が小さくてもいいから安全な地球内に造った方が……

そんなことを思つていると涙がこぼれ出し、突然なにかが身体を包みこんだ……

お姉さまが震える私を安心させるように抱きしめてくれたようだ……

「泣くな、スオ。人間を信じろ。人間は凄い……もし幻想空間が崩壊しそうになつても誰かが気付き何とかしてくれる」

私は声を抑え、強く抱きつきお姉さまの胸を借りて泣いた……そして泣きながら意識が薄れていった……

（レイチャエル side）

ふう……寝ちゃつたか

「それにしてもまさか泣くとは思わなかつた」

これで私が映像として見たような魔法世界が造られるだろうか・・・
もしかしたら私の介入で別のが出来るかもしれない。でも私が
いなければ『造物主の撻』をスオが手に入れることが出来ず魔法世
界なんてものは造れなかつたはず・・・
いや・・・そもそも私がいない原作でも造物主は『造物主の撻』を
持つていた。

それに私のいない原作で造物主が持つていた『造物主の撻』と今ス
オが持つている『造物主の撻』は形状が同じだけで能力が違うかも
しれない・・・

あれ・・・頭がこんがらがつてきた。このことは考えるのをやめよ
う・・・

そういうえば原作知識によるとスオが造物主らしいけど、魔法世界を
造つてそれが崩壊寸前になるまでどうやってスオは生きていたんだ
ろう?スオってまさか人間じゃないとか??

分からぬ・・・まあなるようになるか・・・

第六樂章 私たちの計画（後書き）

難しい・・・文章を書くのが難しい

自分の頭の中を上手く文章化できないし、

文字数を増やそうと思つてもなかなか増えてくれない・・・

とりあえず今後の展開が早く考えないと・・・

ネタとか出してくれれば、《もしかすると》採用するかも・・・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告をお願いします。
できればアンケートに答えて行ってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0023z/>

ネギまに生まれた始祖精霊

2011年12月17日20時34分発行